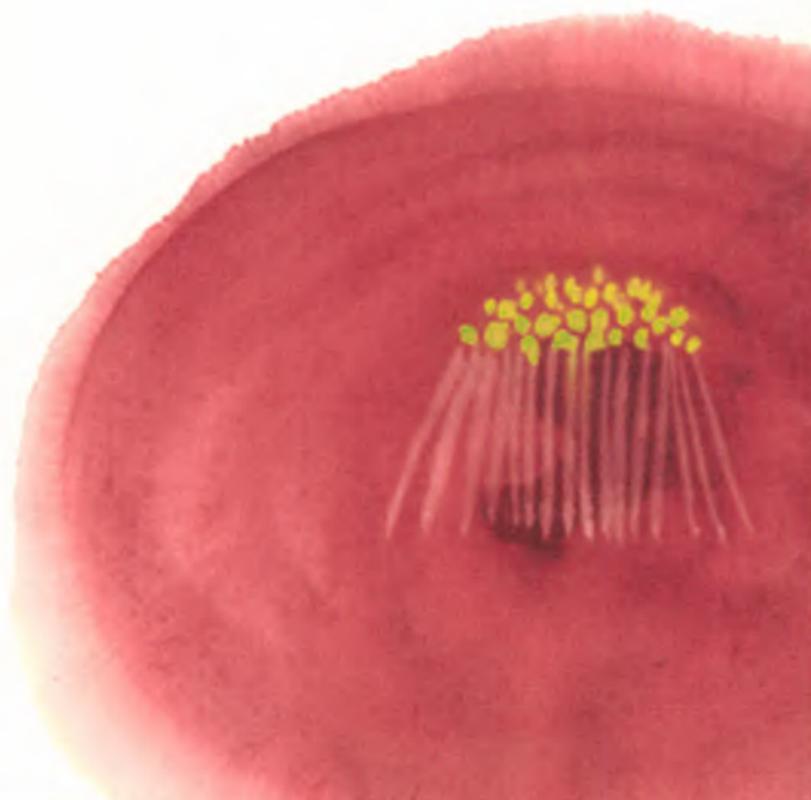


八木千代句集

# 椿抄



八木千代集

# 椿抄

句集

椿抄

八木千代

八木千代句集

椿抄

装幀・ひやまちさと



潮騒を連れてこの世の月が出る

沙羅双樹わが結界にひそとあり

とりあえず門のかたち  
に石二つ

木の机 鳥の匂い  
がしてならぬ

今はたましいの時間で月の下

書きすぎぬように大事なひとに書く

鐘鳴らすいつも一つの願いごと

夜明けまで山の向こうに行つてくる

花びらの重み一枚ずつ違う

ままごとは終わって破る紙の皿

わたくしを壊す遊びが大好きだ

体臭になった傷ぐすりの匂い

白く咲いてくれるだろうか  
白い蕾

水甕があふれて朝を疑わぬ

はらわたに疵がいつぱいある魚

長袖で隠すさびしい腕だから

今折ったばかりの鶴が翔んでゆく

第一ヴァイオリン弾く てっぺんの柿ひとつ

新しい潮が玄関から入る

山を見て秋の呼吸にもどるなり



サーカスの旗をたたんでいる女

桜通りも椿通りも行きどまり

みやこわすれ増やしてみやこ忘れられぬ

笹に吊すあさきゆめみし急ひもすと

夕顔がプラトニックに枯れちゃった

触れられたことではじまる桃の傷

花の季は移りそうめん茹でている

湖が溢れノートになぐりがき

稜線で逢うお互いの馬連れて

うす闇のほとけを仰ぐほどの恋

咲けば散ることをひたすら書いている

天の川よりゆらゆらともどるなり

桃の木の向うのひと世ふた世かな

影しばらく重ねて電車すれ違ふ

自らを傷つけて鳴る楽器たち

裂けるまで熟れて石榴はしあわせな

書き終えた手紙と二枚貝の殻

この次に逢うのはきつと日溜まりで

大きな桃が横を流れてくれている

もしかしてさつき拾ったのは未来



われは雁 月の真上を渡るなり

標的をしぼるとすれば月の弦

風車 吾が掌にあつて誕生日

笛吹いて出れば見知らぬ人ばかり

月は遙か海は死ぬまで満たされぬ

綱引きの綱におびただしい鱗

花あまた殊に烈しく白が咲く

ていねいに洗う落ちたら割れる皿

流れるものを見ている拾えないでいる

わたくしの枕に三日月の匂い

面影をたどると弥陀の眉あたり

奥の手は奥にひそめてかくれんぼ

月の下  
仏千手の盆踊り

あとさきが抜けても進む踊りの輪

水鷄院 釈真諦と日に三度

見送っていたただけるなら萩の道

有縁の真ん中に椿が咲いてくれる

黙って眠ってそのうち糸を吐くつもり

いつの世も月から降ってくることは

死顔を月に預けて翔ぶばかり



大屋根は女主人を信じない

母系かさねて紅の椿の紅の濃さ

カラスなぜ鳴いたもうもう子は産めぬ

風もおとこもとびらを出るとちりぢりに

哀しみを移す寝返り打っている

稲光り天もなにかを産んだのだ

おろかにもあとの祭りの酒買いに

毒消し売りが来て毒売りとすれ違ふ

萩すすき忘れぐすりはいらんかね

はみだしたものを納める箱の中

枯れ野にも小さな弓は負うてゆく

通りゃんせそしてかならず戻りゃんせ

二の矢三の矢まだ正体はわからない

折れた矢を数え残りの矢を数え

いざとなればうしろの藁に火をつける

結界をくぐり抜けても風の原因

同じ顔している猿と猿回し

棧敷から鬼が総見してくれる

舞台に雪降る

積もらせはしない



境界のところどころに椿の木

どの井戸も底があるので救われる

現実に橋のたもとの一軒屋

焚火囲もうよ傷の掌かざそうよ

錯覚の場所を何度も掃きに行く

気がかりな毬を置き場にもどしたか

双子座も獅子座も天に咲く椿

花火の筒は声を殺して待っている

まだ言えないが蛭の宿はつきとめた

仮の名をもう一世だけ使いたし

神もわたしを探し続けていられよう

最後に残った勇気で梯子から降りる

焙り絵の顔は観念して焼かれた

今嘘を書けば昨日も嘘になる

わたくしの中を  
通って咲く椿

レパトリーは二つ  
咲くこと落ちること

椿  
私かも男かも仏かも

椿守  
死なぬかぎり  
は椿守

赤を零して拾って生きてゆくばかり

これからの坂の視界も愉しみな

ありのまま流れる

とてもいいきもち

あとがき

「ワレモヨカレヒトモヨカレワレハヒトヨリチョンボリヨケイヨカレ」  
これは古い米子言葉です。

「私に良い事がありますように。まわりの人にも良い事がありますように。そして私は他の人よりチョコツとだけ余計に良い運がきますように」標準語ではこうなります。祖母の口癖でした。

それなのに、この『椿抄』ではわたくしばかり得をしまいそうです。集句、選句、構成、印刷、装本など、すべての諸経費はあざみエージェントさんの御厚意によるものです。半年くらいかけての膨大な大切

なお時間を私の拙い句集のために傾けてくださいました。改めて朝世さんにお礼を申し上げます。有難うございました。勿体ないです。

また装幀のひやまちさとさんとは古くて深いご縁に結ばれていまして、こんなに美しいあたたかい絵をくださいました。ちさとさん、ほんとうに有難うございます。

せめてはこの句集を掌に載せてくださいます方々に良い運が巡ってきますように、お健やかに暮らして頂きますようにと、これからもずっと祈らせていただきます。

平成二十四年六月三十日

八木千代

八木千代 (やぎ ちよ)

- 1924年 米子市に生まれる  
1965年 川柳塔同人になる  
1967年 女性ばかりのグループ・  
きやらぼく川柳会を創る  
風の会、塾、川柳展望で学ぶ  
1999年 第一句集『椿守』を上梓

師系 橋高薫風

椿抄

著者 八木千代

発行者 富上朝世

発行所 あざみエージェント

〒五三四一〇〇一二

大阪市都島区御幸町二一十一一五〇六

電話 〇九〇一三七二六一五八五三

HP: <http://azamiagent.com>

E-mail: [info@azamiagent.com](mailto:info@azamiagent.com)

装 幀 ひやまちやま

印刷製本 (株) 国際印刷出版研究所

発行日 二〇一二年六月三十日

© Chiyo Yagi 2012 Printed in Japan

ISBN978-4-906849-01-7 C0092 ¥1000E

不良本はお取り替えいたしません。



あざみ  
エージェント



9784906849017

ISBN978-4-906849-01-7

C0092 ¥1000E



1920092010000

定価：本体 1,000 円＋税

あざみエージェント



あざみ  
エージェント